

神奈川県高等学校教科研究会

社会科部会報

2012（平成24）年5月23日発行

「第70号」

社会科部会事業報告・決算報告・予算案	2～3
社会科部会実施事業・事業計画案	4～7
秋季研究大会講演要旨 守屋由紀氏	8～10
各分科会報告・等	11～18
訃報・訂正	18・19

事務局 神奈川県立新城高等学校

岡崎 恭一

〒211-0042 川崎市中原区下新城1-14-1

TEL 044-766-7456 FAX 044-752-7812

平成24（2012）年度社会科部会春季研究大会および講演会

- 1 日 時 平成24（2012）年5月23日（水） 9：00～17：00
- 2 会 場 かながわ県民センター 横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2（TEL 045-312-1121）
- 3 時 程 9：30～10：00 受付、資料配布（名簿・部会報・研究報告などの配布）
10：00～11：00 研究大会（大ホール）
総司会 三橋 健彦（県立茅ヶ崎高校）
開会のことば 杉山 登（逗子開成高校）
部会長挨拶 川上 信昭（県立麻溝台高校）
議長団選出
議 事 1) 2011年度事業報告
2) 2011年度会計報告
3) 2011年度会計監査報告
4) 2012年度事業計画
5) 2012年度予算案
6) 指名委員選出
7) その他
議長団解任 各分科会全体報告 連絡・他
11：20～12：20 各分科会議事（事業報告・計画、決算・予算）等
歴史（大ホール） 地理（403号室） 倫政（201号室）
12：20～13：30 昼食・休憩 指名委員会
13：30～13：45 広報活動（大ホール）
13：45～14：00 2012年度役員選出、役員紹介・挨拶
14：00～16：30 講演会（大ホール）

4 講演内容

- 【講 師】 柿崎 一郎 先生（横浜市立大学准教授）
- 【演 題】 『タイの大洪水を考える：なぜ騒ぎが大きくなったのか』

<講師プロフィール> 柿崎 一郎（かきざき いちろう）先生

1971年 静岡県生まれ 1999年 東京外国語大学大学院 地域文化研究科博士後期課程修了

現 在 横浜市立大学国際総合科学部 准教授

タイを中心にメコン川流域の交通網の発達や、バンコクの都市交通の整備に関する研究を進める。

論 文 『タイにおける交通網の発展 1897～1923年 ―時間距離の変遷―』

『東南アジア ―歴史と文化― 第26巻』（東南アジア史学会、1997年）

『鉄道整備と新たな物流の形成 ―タイにおける豚の事例―』

『アジア・アフリカ言語文化研究 第55巻』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1998年）

著 書 『タイ経済と鉄道1885～1935年』（日本経済評論社、2000年）

『物語 タイの歴史』（中央公論新社、2007年） 『王国の鉄道―タイ鉄道の歴史』（京都大学学術出版）

『東南アジアを学ぼう―「メコン圏」入門』（筑摩書房、2011年）など

2011年度秋季研究大会講演会要旨

「世界の難民問題、UNHCRの活動、日本の役割」

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）
駐日事務所広報官 守屋 由紀 先生
(2011年10月19日 於 柏陽高校)

(1) UNHCR設立60周年を迎えて

2011年6月20日の午後7時から10時まで、国連が制定した「世界難民の日」にあわせて、東京タワーが青くライトアップされました。震災後で節電中だったため電量を半分に落としたので、ほんのり青白く見えました。東北の震災被災地にUNHCRが緊急支援に行き、送り届けたソーラーランタンの光の色にも似ていました。



UNHCRが設立されて60周年を迎えた2011年、世界中でキャンペーンが張られました。日本では、東京タワーが、国連UNHCRの青、希望の青に染められたのでした。タワー下の会場では、世界中の難民の人々が東日本大震災被災者に寄せたたくさんのメッセージが飾られ、歌手の森進一さんやバイオリニストの川井郁子さんによるミニコンサートも開かれました。

(2) UNHCRの60年間を振り返って

60年前の1951年、国連総会は「難民の地位に関する条約（難民条約）」を採択し、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）が設立されました。職員は34名、第二次世界大戦後のあとヨーロッパで家を追われた人たちが新しい生活を始めるのを助けることを目的に設けられた機関でした。3年ないし5年で見直しが行われる暫定機関として出発しました。しかし、難民問題は解決しないばかりか複雑さを増し、2003年にUNHCRは恒久機関となりました。その間1954年と1981年にはUNHCRはノーベル平和賞を受賞しています。現在は職員約7,000名、そのうち80名が日本人です。

難民とは、迫害もしくは紛争を逃れるために自分の家をあとに国境を越え、その先で庇護を求めている人たちを指します。しかし今や国境を越えていない国内避難民の数が難民の数を超えるという逆転現象が起きています。本来ならばその国の政府が国内避難民を保護すべきなのですが、それができない国が少なくないのです。UNHCRはそのような国内避難民をも支援しています。

また、UNHCRの対象というのは、本来マンメイド・ディザスターつまり人間が引き起こした迫害や紛争の被害者でした。しかし、ここ数年の自然災害の被害は甚大であり、紛争と災害が重なって起こっていることもあり、特例的に自然災害被災者も支援対象となっています。たとえば、パキスタンでは紛争で避難していた人々が洪水被害に遭いました。ソマリアでは、内乱状態の中で干ばつによる飢饉が起きました。スーダンの西にあるダルフルでは、水不足から水源を求めて紛争が起いています。自然災害によって経済的発展に歯止めがかかり、政治を不安定にし、緊張を高めていくという負のスパイラルがあります。

また近年、国連やNGOがテロ行為の標的にされるようになりました。かつては紛争当事者同士の間に紳士的な暗黙のルールがあったのですが。あくまで中立的な立場で活動しているUNHCRの職員が2009年にはパキスタンで殺害されました。拉致された職員もいます。また今年8月のナイジェリアの首都アブジャで起こった自爆テロは国連を狙ったもので、UNHCRの車両も破壊されました。安全確保が困難なため私たちの活動が阻害され、必要としている人たちになかなか支援が届かないという厳しいジレンマに直面しています。

(3) 緒方貞子さんの活躍

日本が難民問題と本格的に向き合ったのは、1970年代後半から80年代前半、インドシナからたくさんのボートピープルが出たときでした。直接日本近海まで来た人たち、途中にあるキャンプから日本に来た人たち、合わせて1万1,000人を日本政府は一時受け入れました。30年前の1981年、日本は難民条約に加入しています。

当時の難民のイメージは、「海外のどこか遠くで大変な目に遭っている人たちがいるんだ」「日本に来たインドシナの人たちは国内の一カ所に集められて支援を受けているんだ」といったものではなかったでしょうか。よそごとと捉えていまし

た。

日本人の難民に対するイメージを変え、日本におけるUNHCRの認知度を高めたのは、なんと言っても緒方貞子さんでした。私たちの元上司であり、現在は国際協力機構（JICA）の理事長です。

緒方さん自身が回想しているように、彼女が難民高等弁務官として活躍した1990年代は「激動の十年」でした。冷戦の終結は世界を平和に向かわすどころか、それまで抑えられていた力がはじけ飛び、今までもあった民族間の憎しみが吹き出しました。難民の緊急事態が次々に発生しました。

1991年にサダム・フセインの圧政によってイラクの北部に多くの人たちが追われてきましたが、トルコが国境を封鎖したために国境の手前で足止めされ、国内避難民として厳しい生活を余儀なくされました。また94年には、ルワンダの大虐殺を引き起こしたアフリカ大湖地域の危機が起きました。また91年のソ連邦の崩壊に伴う多くの民族強制移動がありました。またうち続く旧ユーゴスラビア民族間の衝突によって、ヨーロッパにも新たな難民の流れが生まれました。

この間、緒方さんはスイスのジュネーヴにあるUNHCR本部に単身赴任し、世界の過酷な現場を飛び回っていました。東京にいるご家族のもとに年3回ほど休暇をとって帰られるのですが、そんなときもなかなか休ませてもらえません。総理官邸からであったり、宮内庁からであったり、是非緒方先生とお話したいというようなことが多くありました。緒方さんはテレビの画面ではすごく大きく見えるのですが、本当はとても背が低いんですが、近くにいるとオーラがバシバシ出てくるエネルギー感な人です。テニスをこよなく愛し、お酒もたしなむ元気な人です。

緒方さんは世界の表舞台で日本の顔として、日本の国際貢献を大きくアピールしました。今私はUNHCRの広報を担当していますが、教科書会社などからいろいろな問い合わせがあります。その中で圧倒的にリクエストが多いのが、緒方さんの写真なんです。教科書に彼女の写真を入れることによって、生徒は「日本でもがんばっている女性がいるな」と。そこから難民問題に関心をもってくれば悪いことではありませんね。

（４）現在の難民情勢とUNHCR

時は移り2011年。難民問題はなかなか解決しないし、より複雑化してきています。

例えば、「アラブの春」のなかりビアで起きた衝突によって、リビアと国境を接するチュニジアとエジプトには移民労働者など100万人以上の人々が逃れてきています。UNHCRはこれらの人々に一時的なシェルターを与える緊急支援をしています。しかし、UNHCR現地スタッフだけでは足りません。そこで緒方時代にできた「緊急ロスター（当番表）」を活用します。UNHCR職員は誰でも、上司の許可を得た上で自ら手を挙げて、自分の名前を登録しておきます。緊急事態があり、出動要請があれば72時間以内に現在の勤務地から緊急現場に直行するのです。

今UNHCRにとって最大の課題が、ソマリアの人道危機です。「アフリカの角」といわれるソマリアでは、1991年から民兵が横行して無政府状態が続き、そこに干ばつが重なって深刻な食糧難にあります。現在ソマリアから90万人以上が周辺国に逃れてきています。さらに、150万人以上の国内避難民がいます。難民キャンプにいる人たちは、最後の最後に食糧がなくなって、脱出して来た人たちです。「自分の畑をそのままにして逃げたら、誰かに占拠されてしまうかもしれない、家長は家と畑を守るために留まる。母親は子どもを連れて食糧とシェルターが手に入る所に避難しろ」と。厳しい道のりを数週間、徒歩で母親は逃げて来るのですが、途中で一番弱い子どもが命を落とします。その亡骸になった子どもを抱いたままキャンプに連れてくる、そんな母親の姿を何人も見たと、同僚から聞いております。

ケニアのダダーブに最も大きな難民キャンプがあります。1991年に設けられた9万人規模のキャンプなのですが、ここに今50万人が収容されています。UNHCRは、水、食糧、衛生の問題に加えて、キャンプの拡張を土地所有者である地元の政府や有力者と交渉を重ねて行っています。しかし、この難民キャンプ周辺も実はソマリア同様治安は良くないのです。UNHCRが車で移動する際には、前後に警察のエスコートをつけないと危険です。先週もここで「国境なき医師団」の車が襲われました。乗っていたNGOの女性2人は誘拐されて未だに行方が分かっていません。

（５）日本の役割

日本の外交の柱の一つに「人間の安全保障」があります。人間の生存・生活・尊厳に対する脅威から人々を守り、人間の持つ豊かな可能性を実現

することで平和を構築しようというものです。たとえば、JICAが行っているODA（政府開発援助）というのは、日本メーカーは介在しますが、現地の人たちに技術指導して彼らが将来生産の担い手になれるようにします。「日本はインフラだけでなく、目に見えない技術も残していつてくれる」と感謝されています。また、緒方理事長になってから、UNHCRが緊急支援をしたあと、よりいっそうJICAがシームレスに入ってきて復興・開発につながられるようになりました。

また、故郷に帰ることもできないし、避難先の国で定住もかなわない人たちに対して、日本政府は「第三国定住」を認めるようになりました。ミャンマーの少数民族カレン族は迫害を受けてタイに逃れてきたのですが、タイが難民条約に加入していないためタイ国内に正式に住めません。タイの国境近くにある仮のキャンプで暮らしていますが、20年近くたってもそこから出ることは許されず、職業についたり、高等教育を受けたりすることができずにいました。UNHCRはじめ国際社会の要請によって、キャンプにいるカレン族の人たちに2005年から第三国定住の道が開かれました。昨年アジアで初めて日本は、希望するカレン族の人たちに国内定住を認めました。日本でも水際で難民が来るのを待つのではなく、難民キャンプに直接でかけて難民に面接して連れてくる手筈を講じる方向が開かれたのです。

またUNHCRは民間企業のユニクロとパートナーシップを組んでいます。ユニクロは、店頭で回収したもう着なくなったユニクロ製品を選別して、必要としている難民キャンプに送り届けています。5年間ですでに300万着が届けられ、ケニアにもまもなく100万着が届く予定です。難民となった人たちは着の身着のまま逃げてきたので、衣類の持ち合わせはありません。難民の現場では衣類は安全・衛生や防寒・防暑だけでなく、人間の尊厳のためにも必要なのです。ちゃんとした着る物や下着があるからこそ学校に行けるのです。多くの女性にとってきちんとした衣類は社会参加のきっかけになります。日本から持って行くと、難民の人たちは「自分たちのことなんか忘れられていると思っていた。日本人がこんな所まで持ってきてくれた。どれだけの距離だったの。どれだけ時間がかかったの」と喜んでくれます。

このようなことがあって、東日本大震災に際しては、難民キャンプにいる人々も含めて世界中か

ら多くのメッセージが寄せられました。また日本にいる多くの難民の方たちが今こそ恩返しと、ボランティアとして被災現場や避難所に足を運んでくれました。

残念ながら、日本のODA予算は年々減ってきて、今世界で第5位から第6位です。GNI比ではもっと下位になります。2009年の試算では、日本国民1人あたり687円の負担だそうです。震災からの復興が第一義でしょうが、ODAを止めてはいけません。今までの日本の支援に感謝している人たち、日本の支援を必要とし期待している人たちのために何とか続けていってほしいと思います。

(6) “One is too many. Do one thing.”

何千万人という難民や国内避難民一人一人が、それぞれヒューマンストーリーを抱え、それぞれの問題を抱えています。「1人でも多すぎる（One is too many.）」。元の場所に戻れない人が1人でもいれば多すぎる。シェルターがない家族が1つでもあれば多すぎる。キャンプの中で生まれ育つ子どもが1人でもいれば多すぎるんだと。

それでは、その状況をどう動かしていったらよいのでしょうか。「何か1つ始めよう（Do one thing.）」。たとえば、日本に住む難民の子どもの作文を読んだことを友人や家族に伝える。ソーシャルメディアでつぶやいてみる。着なくなったユニクロ製品を店舗に持って行く。UNHCRの活動のために寄付をする。UNHCRの予算は2%しか国連から出ていなくて、あとは個人や企業、各国政府の寄付でまかなわれているのです。何か1つ始めることによって世界の問題に自分が関わっていることの意識が芽生えてきます。

先生方には、難民問題を授業で取り上げていただければと思います。「こういう資料を授業で使いたいのだが」とUNHCRに言っていただきましたらお送りいたします。いくつかの学校やガールスカウトでは、UNHCRが作成した冊子『この人はなぜ？ 日本からできること』を使っているところですよ。

本日は、ご静聴どうも有り難うございました。

[県立新羽高校 粟ヶ窪令子がテープ起こしを行い、県立上鶴間高校 落合 隆が要約を行った。]

歴史分科会活動報告

日本史研究推進委員会

日本史研究推進委員会は、昨年度も「神奈川における交易・交流—モノを活用した日本史教材」を共同研究テーマとし、活動を続けてまいりました。「神奈川の教材化」が常に活動の念頭にありますが、年間の活動を顧みると、必ずしもそれだけにこだわらず、平成25年度より実施される県立高等学校における日本史の必修化も見すえながら、そのあり方や、日常の授業実践のヒントになる活動・企画を求める傾向が強くなりました。

活動の柱は、毎月1回の定例会、夏休みに行われる日本史サマーセミナー、夏と冬の踏査、秋と春の研究発表です。以下、順に報告いたします。

定例会は、各委員の勤務校を会場に毎月1回水曜日に行われます。各委員のレポートをメインに、サマーセミナーや踏査などのイベントに向けての意見交換や準備が行われます。特に11月の月例会では、一昨年度に引き続き鎌倉学園高校 風間洋先生の尽力で建長寺の見学をさせていただきました。

日本史サマーセミナーは、昨秋発行の部会報(69号)の報告の通り、8月23・24日の両日に県立柏陽高校で行われました。日本史必修化をみすえた県独自科目「近現代と神奈川」の実施研究(県立柏陽高校 矢野慎一先生・県立大磯高校 小田貞宏先生)、および「近現代日中関係史」(逗子開成中・高校 杉山登先生)「近現代沖縄史」(県立上鶴間高校 児玉祥一先生)の受験対策授業が行われました。

夏の踏査は8月26日。県立小田原高校 香川芳文先生の案内で、小田原を中心に、伊藤博文や山縣有朋といった明治の政治家等につわる、旧別荘など史跡を巡検しました。冬の踏査は1月6日。県立生田高校 白川重敏先生の案内で、東京の立川駅周辺の旧柴崎村および普濟寺から郷土資料館、昭和記念公園に至るルートを歩きました。

秋季研究大会は10月19日に柏陽高校において、授業研究として行われました。歴史分科会の授業者は県立柏陽高校 矢野慎一先生で、題目は「第一次世界大戦と日本」。大正政変にスポットをあてて、時代背景からその歴史的意義までを、多角的にとらえさせる試みでした。

春季研究発表会は世界史研究推進委員会との共

催で3月5日。筆者(中田)が「文禄・慶長の役(壬辰・丁酉の倭乱)後の蔚山と在地両班」と題し、日韓関係史上の出来事と非常にかかわりの深い、蔚山の両班鶴城李氏が家門を形成するまでの過程とその特徴を報告しました。

日本史必修化がはじまる平成25(2013)年夏に開催される全歴研神奈川大会では、近現代日本史をどう教えるかが主要テーマの一つになりそうです。ぜひ、この機会に向け、一人でも多くの先生方の委員会へのご参加をお待ちしております。

末筆ながら、月例会で会場を提供いただいた各高等学校に対し、この場を借りて感謝申し上げます。
(県立茅ヶ崎高校 中田 稔)

世界史研究推進委員会

2011年度も、世界史研究推進委員会は、おおむね2か月に1回のペースで、横浜市立みなと総合高校、藤沢総合高校、栄光学園を会場に委員会を開催しました。本年度の主な活動は、定例の委員会での各先生方の研究発表の他、次の通りです。

・輪読会『世界経済の歴史—グローバル経済史入門』(名古屋大学出版会)

・研究発表

春季研究大会

「19世紀のアジア史をどう教えるか」

問題提起 石橋 功(藤沢総合高校)

澤野 理(川崎工科高校)

研究発表

「19世紀の南アジア」

神田 基成(鎌倉学園高校)

「19世紀の西アジア」

柴 康登(桐蔭学園高校)

なお本発表は、昨年4月27日より29日の日程で、韓国梨花女子大学にて開催した、AAWH(アジア世界史学会)でも発表されました。

また、夏季の「高大連携の試み」は、昨年度も栄光学園を会場に、推進委員会メンバーによる模擬授業の他、大阪大学 桃木至朗先生、秋田 茂先生、東京大学 杉山清彦先生にも講義を頂き、また生徒の方も、栄光学園高校をはじめ、例年になく多くの学校から多数の参加が見られました。

また午後の研究会では、大阪大学、東京大学、日本学術振興会の先生方、他都府県の先生方と交え、非常に活発で有意義な研究討議を行うことが出来ました。

諸先生方におかれましては、校務ご多忙の折と拝察申し上げますが、今年度も引き続き、社会科部会および各委員会への参加を、よろしくお願いいたします。(県立寒川高校 根岸 洋史)

テスト委員会

テスト委員会では、新入生テストにおける歴史分野の問題と県下一斉テスト問題の作成・検討及び校正作業を行っています。

昨年度は、従来1月に行っていた県下一斉テストを11月に実施しました。実施時期の変更を事前に周知徹底することができず、ご迷惑をおかけし申し訳ありません。11月に変更しましたが、採用部数の増加にはつながりませんでした。

他教科が県下一斉テスト問題の作成から撤退している中、歴史分科会もテスト委員会がいかに関与すべきかについて検討する必要に迫られています。テスト委員会のあり方について、何かご意見がありましたら、お近くのテスト委員または藤沢西高校 渡邊まで連絡をいただければ幸いです。

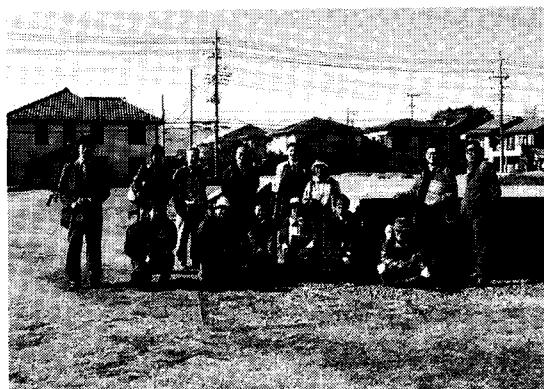
(県立藤沢西高校 渡邊 一弘)

史跡踏査委員会

第46回秋季県内史跡踏査報告

第46回秋季史跡踏査は、古墳時代から古代にかけての相模国成立期の様相を探求するため、海老名地域を対象として、2011(平成23)年11月16日(水)に秋晴れの下、実施した。周知のように、この地域には古墳時代前期の秋葉山古墳群と奈良時代の相模国国分寺・国分尼寺がある。また、最近では考古学的な成果に基づいて平塚地域に相模国国府が存在したという学説が有力となっているが、従来からの国分寺の近辺に国府があったという学説によって海老名周辺に国府があったという説も捨て去られてはいない。今回は、海老名市教育委員会の須田誠氏に案内と解説をお願いした。

国分寺跡に隣接する温故館(かつては国分寺跡の東側に旧海老名村役場の建物を利用していたが、耐震関係のことなどから遺跡の西側に新しく建て替えられた)で出土遺物や国分寺の復元模型などを見ながら解説をしていただいた。須田氏が作成された42頁にも及ぶ資料冊子も相まって、相模国分寺・尼寺の発掘調査から問題点の指摘、史跡としての保存・整備・活用に至るまで全体像が手に取るように理解できた。解説の折々に挟まれた



相模国国分寺跡

「裏話」も大変興味深かった。国分寺の発掘の最終日にラジコンヘリコプターを飛ばして上空より遺跡の写真撮影というときにヘリの調子が悪くなり、この間に延長して発掘したところから鍍金の施された塔の「水煙」が発見されたエピソードなど発掘当時の様子がよみがえるようであった。北側に広く平らな土地があるにもかかわらず座間丘陵の裾部ギリギリに寺地が設定されていることや全国的にみて類例の少ない法隆寺式伽藍配置、金堂と講堂に葺石状の基壇化粧が施されており古代寺院として他に類例がないこと、武蔵国分寺と異なり屋根瓦の出土が極端に少ないことなど、未解明の課題が多いという。建立年代は、8世紀前半の瓦やその他の出土遺物がないことから、741年の「国分寺建立の詔」以降に造営されたと考えられている。国の指定史跡であるとともに保存・整備がなされ、史跡公園として広々とした芝生面では幼い子どもたちがのびのびと駆けまわっていた。地域住民の憩いの場として機能している。遺跡としての国分寺の存在は確固たるものであるが、残念ながら8世紀の国府が周辺に存在したかどうかは考古学的に確かめられていないという。

おそらく、舟運や国分寺建立の建築資材を運ぶのに利用されたであろう「逆川」の古代推定流路跡の一部をたどって国分尼寺へ移動した。現在はひっそりとした場所となっており、金堂跡の土壇・礎石が尼寺を物語る縁となっているが、こちらでもかつて発掘調査が行われ全国の国分尼寺のなかでは遺跡全体が良く残っており、中門・金堂・講堂が一直線に並ぶ伽藍と「法華寺」の墨書土器が確認されている。弥生神社の階段を上り丘陵上へ出ると、眼下に厚木方面の平野が広がっていた。国道246号線を越えて秋葉山古墳群へ。

地理分科会活動報告

企画委員会

【1】地理研究発表会

2011年度の地理研究発表会は3月7日(水)に、県立横浜平沼高校で行われた。45名の方に参加していただき、盛況のなかでシンポジウム・講演会が進められた。

2011年は日本でも世界でも大地震や大津波、洪水、土砂災害などの自然災害に見舞われ、大きな被害を出した。自然の脅威を改めて思い知るとともに、防災の必要性を再認識し、備えを行う機会となった。そこで「地理教育は防災にいかに関与するか」というテーマを設定した。

今年度のパネリストは、授業の中で「自然環境と防災」について取り組んでおられる先生方をお迎えした。まず鶴嶺高校の能勢博之先生に「微地形を学び洪水に備える～ミニ巡検で観察力を育成～」というテーマで、学校周辺での微地形についての授業展開を発表していただいた。次に神奈川総合高校の久称田啓嗣先生に「地理A『自然環境と防災』の実践例を考える」というテーマで水害の原因と対策を中心とした授業実践について発表していただいた。続いて永谷高校の関口圭先生に「数値地図5mメッシュを用いた横浜市・川崎市における津波ハザードマップ」というテーマで、沿岸地域の津波による浸水域について考察していただいた。最後に公文国際学園高等部の米山宏先生に「地理の目で地震・津波から生き残る」というテーマで、三浦半島の活断層を取り上げながら発表していただいた。4人の先生の発表はいずれも実践的で授業で活用したり応用できる内容であったため、質問や意見も多く出された。

後半は、神奈川県都市整備技術センター 県央支所長の村上隆博氏をお迎えして、「自然災害とそ

座間丘陵の頂部(標高80m)、クランク状となった尾根筋に6基(うち1基は未発掘)の古墳が連なる秋葉山古墳群。名前の由来は、第2号墳の墳丘上に「秋葉社」という祠が祭られていたからという。発掘調査の結果、前方後円形墳墓(第3号墳・3世紀後半)・前方後方形墳墓(第4号墳・3世紀後半)・前方後円墳(第2号墳・3世紀末～4世紀初頭、第1号墳・4世紀前半)・方墳(第5号墳・4世紀前半)とバラエティに富んだ古墳群であることが分かっている。注目点は第3号墳で、昭和30年代に前方部が削平され現在は円墳に見えるが、「纏向型」と呼ばれる発生期の墳丘墓である。内面に水銀朱の付いた土器が出土している。また、第2号墳から出土した4点の「円筒形土製品」は他に類例が確認されていない。特殊器台(やがて円筒埴輪へ変化する)の影響を受けてこの地域で独自に作られたものと考えられている。列島の古墳時代黎明期に匹敵する時期に造営された古墳群である秋葉山古墳を造営した勢力と邪馬台国あるいはヤマト王権との関連がどのようなものであったのか、解明が待たれるところである。



秋葉山古墳群

秋葉山古墳群は何度も開発の波にさらされ、墳丘が削られたり消滅の危機にあった。明治から大正期に海老名村の遺跡を調べ、記録を残した中山毎吉ら先人たちの功績、地域の遺跡を守ってきた地元の人々の努力により、平成17年に国の史跡に指定された。周囲には消失した古墳の存在もいくつか推定されており、古墳ではないかと思われる土の高まりのある場所を須田氏に案内していただきながら流れ解散となった。

(県立湘南高校定時制 丸山 理)



研究発表会(県立横浜平沼高校)

の対応」というテーマで講演が行われた。土砂災害の現状とその防止対策について、長年現場で担当された経験からわかりやすく説明していただき、大変参考になるものであった。

半日ではあったが、シンポジウムと講演の2本立てで有意義な研究発表会となった。

【2】地理紀要29号

昨年度はロシア沿海州の海外研修報告と、教材紹介1本、夏季・秋季の野外調査報告2本、委員会報告4本を掲載した。校務多忙のなかでご執筆いただいた教材紹介や報告です。ぜひご一読ください。次号以降も研究論文や紀行文、教材紹介・授業実践などを投稿していただければ幸いです。

(県立七里ガ浜高校 中島 功)

教材委員会

教材委員会では、「新地理演習帳」および「トライ地理A」の2種類の教材の編集・改訂を行っている。「新地理演習帳」は広く受験にも対応するべく世界の諸地域を網羅し、内容の濃いものとなっている。「トライ地理20」は、これから地理を勉強する生徒に興味関心をもってもらえるような基本的な内容で、問題も各項目20題にしばり、取り組みやすいのが特徴である。

委員会の作業は、年に数回の会合を持ち、改訂作業を行っている。改訂内容を持ち帰り、自宅での作業が中心である。ここ数年は採用部数が減ってきていることから、在庫が残っており、また新指導要領の実施時期が近づいていることから大幅な改訂は行わず、「新地理演習帳」と「トライ地理20」を交互に改訂する形をとっている。今年度は「トライ地理20」の内容の見直し、統計の差し替え等を行った。来年以降は新指導要領に対応した新たな演習帳の作成にむけて、検討をしていく予定である。

(県立茅ヶ崎西浜高校 山本 敦)

野外調査委員会

秋季野外調査実施報告(2011年12月9日)

1. 旧東海道

京急青物横丁駅前でバスを降り、街道沿いの海雲寺と品川寺(ほんせんじ)を訪ねました。海雲寺は1251年に創建され、火の神様である千駄荒神をお祭しています。品川寺は806~810年頃に創建され、入口の地蔵は72,000人の寄付によって作ら

れました。境内の鐘はパリ万博に出展するも紛失。その後、スイスのジュネーブで発見され、返還されました。双方の共通点は境内に銀杏の木が植えられていることです。銀杏の木はかつてここの海運の目印でした。

品川寺を出て東海道を東京方面に10分ほど歩きますと荏原神社に着きます。ここ一帯は海のそばだったため、荏原神社は龍神をお祭しています。毎年5月下旬または6月上旬に船に神輿を乗せ、海中渡御の祭が行われます。

東海道の大きな見どころとして、国道15号沿いに鎮座する品川神社があります。江戸時代に富士講と呼ばれる富士山を信仰する集団が多く形成されましたが、品川神社の富士講は今でも活動をしています。境内には富士山を模した品川富士が作られ、富士登山を疑似体験することができます。

2. 東京水再生センター

水再生センターは東京で20か所、日本で2,100か所あり、各地の下水を処理しています。芝浦が処理する量は1日に25mプール2,000杯分です。下水はまず沈みやすい汚物を沈殿させた後、微生物の入った泥(活性汚泥)を加えて、6~8時間かけてかき混ぜます。下水中の汚物は微生物が分解し、細かい汚物も微生物に付着して沈みやすい汚泥のかたまりになります。汚泥と上澄みに分離したところで、上澄み(処理水)だけを川に放流します。最終工程において大腸菌等を殺菌するために塩素を用いますが、それ以外はすべて微生物によって水を浄化しています。底に沈んだ汚泥は乾燥させ、レンガに焼き上げて再利用されます。

3. (株)パソナグループ アーバン・ファーム

東京大手町のビル群の中でバスを降りました。こちらでは窓一面に計画的に落葉樹を植えています。夏に生い茂った葉が日光を遮り、冬には葉が落ちて日光を取り入れるという樹木の特性を生か



パソナ見学の様子

しつつ、環境にもやさしい工夫が施されていました。屋内も驚きの連続でした。座席の下にスプラウトが植えられていたり、応接室の中にトマトが栽培されていたりと、見る人を楽しませる仕掛けが施されていました。

4. おわりに

私は品川・芝浦で育ちました。今回の巡検の中で、かつて気がつかなかった発見がいくつもあり、見慣れた風景の中に新鮮さを見出すことができました。時代が移り変わり、昔懐かしいものが減っていく中、時代に左右されない人々の心のよりどころのようなものを保存、伝承していくことが私たちの役目だと考えます。

(市立川崎高校定時制 布山 明)

テスト委員会

「県下一斉テスト」はこれまで1月に実施されてきたが、2011年度より11月に実施されることになった。当委員会では問題検討会議を2か月前倒して実施、9月上旬に入稿、10月上旬までに3回の校正を経て完成となった。

今回も、例年と同じ分野別の大問7問で構成、基礎的なものや発展的なもの、時事的なものや思考を要するものなど、多様な問題の作成に努めた。

実施時期以外は例年通りだったが、採用いただいた校数は例年通りというわけにはいかなかった。

実施時期の問題はさておき、「県下一斉テスト」自体が岐路に立たされていることは明らかである。廃止を検討する教科もあるときくが、引き続き実施される予定の社会でも、今まで通りでよいのか、検討が必要な時期にきている。『地理紀要』に全問題と解説が掲載されている。ご覧いただき、テストのあり方や、問題に対するご意見をいただければ幸いである。

(県立厚木高校 磯崎 厚)

地域研究委員会

現在、地域研究委員会では、各委員が神奈川県内の地域を分担し、「地理的景観の変化」、「失われつつある歴史的遺構」等、のテーマに基づき、レポートを作成している。これらの成果は、地域研究委員会が作成する「変わりゆく神奈川県」のホームページに、逐次公開している。

また、昨年8月には磯子工業高校定時制の大胡先生を中心に、横浜市金沢区で巡検を実施した。金沢区は、鎌倉時代や明治憲法、そして旧日本海軍などに関わる歴史、埋め立て、都市化、工業化と言った地理的視点から見所のある地域である。このような巡検を通じて、地域の新しい動きを、各委員が共有している。

「変わりゆく神奈川県」の出版以降、地道な地域の研究と成果報告(HP作成)が、委員会の主な活動となっている。だが、次年度からは新しい出版物の内容も含め、今後の地域研究委員会が取り上げるべき課題を模索していく予定である。また、ホームページの内容もより充実させたい。

(県立釜利谷高校 井上 達也)

海外研修委員会

昨年度は地理分科会の主催による海外研修が7月下旬の5泊6日で、ロシア沿海州方面を訪問地として実施されました。成田よりウラジオストクに飛び、ナホトカ見学後シベリア鉄道にてハバロフスクに移動後帰国するという行程で、夏休み中とはいえ部活や補習等でお忙しい中で、一部学生を含む18名の先生方にご参加いただき、和気あいあいとした雰囲気の道中でした。現地では日本車の大中古車市場やアムール河畔から見る中国国境など、地理教員なら垂涎ものの地を訪れことも出来、一同大満足で帰国の途につきました。

プーチン大統領の返り咲きも決まり、今年のAPECの開催地でもあるウラジオストクをはじめ、極東地方はまさしく注目を集めつつあります。今後益々の発展が予想されるロシア極東の今を、このタイミングで訪れたことは非常に価値があることだったと思われます。今回は2014年の実施を予定しています。訪問希望地などありましたらご遠慮なくお近くの地理分科会役員までお声をおかけ下さい。(公文国際学園 米山 宏)

コンピュータ委員会 <http://www.kana-chiri.org/>

コンピュータ委員会は地理教材の情報共有化をめざして活動している。昨年度もあまり更新が進まなかったが、社会科部会報をPDFにし



て掲載した。分科会の活動報告として今後も更新を続けていきたい。また、地理分科会で企画する野外調査の案内なども随時掲載していく予定である。(県立茅ヶ崎西浜高校 新井 隆)

倫政分科会活動報告

平成23年度全国公民科・社会科教育研究会全国研究大会(千葉大会)の概要

2011年11月1日(火)～2日(水)千葉市の「ポートプラザちば」において、全国公民科・社会科教育研究会の全国研究大会が開催された。

1. 文科省調査官講演

文部科学省教科調査官の樋口雅夫先生より、「学習指導要領『公民科』について」と題する講演が行われた。今回の新学習指導要領では、言語活動の充実が大きなテーマとなっている。知識・技能を習得するのも、これらを活用し課題を解決するために思考し、判断し、表現するのもすべて言語によって行われる。さらに言語は論理的思考だけではなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤であり、豊かな心をはぐくむ上でも、言語に関する能力を高めていくことが必要である。公民科においても論述したり討論したりするなどの活動を通して教科の特質に応じた言語活動の充実を図る必要があるとの講演内容であった。

2. 分科会

今回、現社の分科会で神奈川県立三崎臨海高等学校の金子幹夫先生からの報告があった。金子先生は「公民科教育における小中高共通の基



盤づくり～体験型学習とカリキュラム構築の研究～」と題された講演をされた。生徒に新聞を読ませるために記事の間違い探しのプリントを配布された授業や、分業を理解させるための折り紙を使った授業の紹介をされ、また小学校・中学校の公民科教育を前提に授業を行うために、実際に小学校で授業をした報告などをされていた。分科会の中でも特に注目を受けた発表であった。この発表の詳細については紀要『倫理・政経・現社研究第45号』をご覧いただきたい。

今回は通常の3分科会に加えて特別分科会として千葉地方検察庁にて、千葉県立千葉高等学校の藤井剛先生により「法教育の取り組み～法曹と連携した模擬裁判～」と題する公開授業が行われた。

藤井先生は裁判員制度の導入以後、模擬裁判の授業に取り組んでこられた。実際に千葉地方検察庁の特設模擬法廷で生徒が裁判官、弁護士、被告人などを演じ、クラスの全生徒が5グループに分かれて評議を行う。各グループには法曹関係者(弁護士、検察官、ロースクールの学生)がつき、法的なアドバイスを行うという本格的な実践であった。

3. 記念講演

2日目には慶應義塾大学経済学部教授の金子勝先生より「3. 11後の世界 脱原発成長論」と題する講演があった。金子先生はテレビ等でも辛口の評論で知られ、特に小泉改革に対する批判の急先鋒であられ、今回も現在の問題について熱く語られていた。政府等に対して批判的な発言を続けることは、心理的にも強い負担になることは余談から感じられたが、「言うべきことを今、言わなければ後悔する」との一念で発言を続けているとの一言が印象に残った。講演の内容として、原発問題と不良債権問題が情報隠しや「大きすぎて潰せない」点で似ていること、世界が抱える三重の危機(世界金融危機、エネルギー危機、地球温暖化)に対し、大恐慌の教訓を生かし、エネルギーと食料の問題から解決策を目指すべきことなどが提言された。

4. 千葉県に関する映像と講演

2日目の午後にはNPO法人安房文化遺産フォーラム代表の愛沢伸雄先生による講演があった。愛沢先生は、北海道および千葉県の高校で長く教員を務められた後、NPO法人を設立され、南房総の戦争遺跡や里見氏の文化財、海洋文化などの地域に残る文化遺産を「地域まるごと博物館」として保存・活用される取り組みを続けてこられた。市民の草の根の活動により、里見氏稲村城跡は国指定史跡となり、戦争遺跡である赤山地下壕は館山市指定史跡として整備され、平和学習の拠点として年間2万人近くが見学するようになった。

「平和・交流・共生」の理念にたち、これらの文化遺産を学校教育だけでなく、広く社会に生かし、また地域の人々の交流の輪の拠点としていき

たいと話されていた。

5. おわりに

今回の全国大会では、平日にもかかわらず、開催県の千葉県だけでなく全国から参加者があった。残念だったのは神奈川県参加者が東京都などに較べて少なかったことか。今年度の開催地は北海道で、夏休み中に開催される予定である。

(県立茅ヶ崎高校定時制 三橋 健彦)

企画委員会「東京巡検報告」

2012年3月9日(金)に倫理・政経・現代社会分科会の事業「東京巡検および講演会」が行われた。今年度の巡検では、午前中に渋谷にある「日本ユダヤ教団」を、午後は築地の朝日新聞東京本社を訪ねた。いずれも倫理・政経・現社の学習内容に深く関わるものである。毎年多くの皆様に参加していただいております、今回も38名の参加があった。

午前中の「日本ユダヤ教団」では、シナゴーク(会堂)にてユダヤ教のラビであるアントニオ・ディ・ジェスウ(Antonio Di Gesù)氏の解説、東京外国語大学の鶴田知佳子教授による通訳により、ユダヤ教会の主要な部分について案内していただいた。教会内では男性は帽子をかぶることになっている。これは王の中の王である神への従属をしめすため、女性は魅力的な髪を前面に出すためにかぶり物はしないようだ。

ユダヤ教について、シナゴーク、戒律、安息日、トーラー(TORAH)をキーワードにやさしく解説していただいた。日本は暮らしやすいというアントニオ氏によると、国内には約2,000人のユダヤ教徒がいるとのこと。食については豚肉やエビは食べることはなく、ハンバーガーやピザも食べないというお話をいただいた。肉とミルクは調理する鍋も違うものを使い、皿も別にするという。生と死の象徴を共にすることはできないとのことのお話は多くの関心を集めた。活発な質疑応答が繰り返され、教材づくりに向けての大きなヒントをいただくことができた。

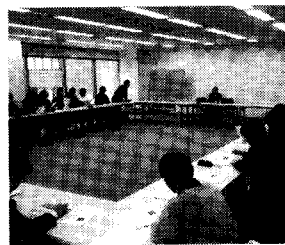


午後には築地に移動して朝日新聞東京本社を訪れた。ホールでは大画面に映し出された編集現場のライブ映

像を見ながら朝日新聞社の概要をうかがい、実際に夕刊原稿締め切り直前の緊迫感あふれるフロアに移動して見学することができた。様々な部が集まる編集のフロアでは、一つの記事が様々な部に関わっている可能性があるために、部ごとに仕切ることにはしていないそうである。また、最終的に紙面の配置を決める重要な会議をする部屋も壁は透明になっており、中の様子が外から見えるようになっていた。新聞社のオフィスは、日々の新聞づくりの中で考案された様々なアイデアで一杯であった。

編集の仕事を見た後は、それらの記事が実際に新聞になる印刷現場に移動した。ここでは、新聞ができあがる瞬間を見ることができた。どうして紙面にカラーの写真を掲載することができるのか? オフセット印刷の言葉の由来など実験を通してわかりやすく説明していただいた。

その後、小此木潔元論説副主幹の「欧州危機の深まりと世界経済および日本のゆくえ」というご講演をいただいた。アマルティア・センのインタビューにはじまる講演の課題は、不確実性の正体を世界経済危機と原発危機の二つの軸で捉えるというものであった。「世界恐慌は再発するのか?」という問いに、覇権国が世界経済を支える力があるのにその思いがないと恐慌が起こるのだというメッセージを発信していただいた。



1日を通して、私たちに教材づくりのための大きなヒントをいただけたことに御礼申し上げます。また、今年度も授業力向上を目指した企画をご提供したいと考える。今回ご参加いただいた皆様のご理解とご協力に改めて感謝申し上げます。

(県立平塚農業高校初声分校 金子 幹夫)

研究委員会

教科や授業に関する様々な情報交換と自由な意見交換や、授業方法に関するレポートと討議をおこなっております。気軽に参加できてためになる、負担の少ない委員会を目指したいと思いますので、多くの方のご参加をお待ちしております。

(県立逗葉高校 斎藤 基博)

テスト委員会

昨年度より、政治経済、倫理、現代社会の県下一斉テストの日程が11月に変更となりました。事前のご案内が不十分でご迷惑をお掛けしました。一校でも多くの採用をしていただけるように作問担当一同、努力を重ねてまいります。

(県立新羽高校 峰澤 巧輝)

教材委員会

今年度は公民科の新版教科書の研究・分析と、今まで作成した教材の改訂等の作業に入ります。独自教材の作成も含め、関心のある先生方の参加をお待ちしております。

(県立新羽高校 栗ヶ窪 令子)

一 訃 報 一 岩田壮一郎先生

社会科部会副会長であった岩田壮一郎先生が平成23（2011）年4月29日享年90歳のご高齢で、逝去されました。先生は昭和21年5月から神奈川県立第二中学校（現横浜翠嵐高校）に着任され、社会科を担当しました。その後、社会科部会でご活動され、昭和30年代に入り、本部幹事（地理）や会計監査を歴任、38年には部会の副会長に推され、部会としても種々ご教示をいただいて参りました。

先生は昭和41年に県教育委員会の指導主事として行政へ移られ、47年9月には県立ゆうかり養護学校長、51年9月には県立衛生短期大学二俣川高校長を歴任され、そして52年9月から再度県教育庁へと移られ、学校保健課主幹を経て、54年9月からは総務室主幹として新しい養護学校の開設準備また運営など、特別支援学校関係の整備に尽力されました。

終わりに岩田先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

(顧問 中村 憲良)